

生徒募集

書間部新學年開始

四月八日入學式

豫科一年ハ無試験

他學年及ビ夜間部各年編入ハ試験ノ上入學ヲ許ス
詳細ハ規則書ヲ見ラレヨ 問合セハ下記へ

就職への近道三ヶ年修了

校報

昭和三年六月號

名古屋新榮町三丁目 電話一七番

名古屋電氣學校

校 内 日 誌

紀 元 節

二月十一日午前九時半紀元節の拜賀式を行ふ。

体育に關する講演

紀元節の式の後レコードの演奏あり、十一時半より日比野寛氏の講演をきく。氏はマラソン王として日本だけでなく全世界にその名を知られてゐる人である。多年教育者として立つて來られたりけあつて若い學生の氣持にピッタリ合つた話しぶり、時々愉快な笑聲が爆發したりして全校生徒は食事時の過ぎるのも忘れて喜んで聽いてゐた。氏の講演の要旨は、我々は自然に即した生活自然に即した歩き方、走り方をしなくてはならぬ、それによつて始めて健康を増進することができると云ふにある。氏は次のやうに云はれる。

『歩く時や走る時の眼の着け處は、上体の直立せる姿勢にて二三丁程先の屋根とか梢などかの高さのものを正視する様に構へ、時々二三間前を視て小石、水溜り、凸凹、其他の小障害でも之を避ける様に氣をつけるのは必要の注意である』人間

の自然型である歩く時は直立直行なる姿勢、坐つたり椅子によつたりする時は腰より上部は眞直ぐにして臍の上に横線を描き出さぬ様の姿勢をすることに何時でも十分の注意をなし、この眞直ぐが習慣性になるまで氣をつけるのである。元來これが生れつきの姿勢である。これに反いた姿勢で以て健康体を作り上げんとするのは抑まぢがつてゐる。』

体 育 訓

- 一、病める者は醫師に往け
- 一、弱き者は歩け
- 一、健康なる者は走れ
- 一、強壯なる者は競走せよ

卒業生の就職について

この三月卒業する者の就職については和田先生荻野先生が主となつて八方に盡力してゐられる。なほ名古屋中央職業紹介所とも提携して就職先の開拓に努めてゐるが、本年の極度の不況は新聞紙上にも傳へられてゐるやうにあらゆる學校の新卒業生の就職を不可能にしてゐる。なか／＼樂觀をゆるさない状態である。

電 氣 禮 讚

和 田 信 次

少し手前味噌かも知れないが電氣禮讚と題した今日の電氣界を基調として來るべき次の電氣文明を想像し——充分可能性ある想像——をして見よう。

先づ電氣發生の裝置、方法等に就て見るに、今日では主として石炭、石油其他の燃料を用ひる蒸汽又は瓦斯機關に依るか、或は水力に依て發生して居る。然し今後の發生原動力は自然力のよりよき利用でなければならぬ。即地球の引力、地熱、太陽の熱力、風力、潮力等に依らなければならぬであらう。此等の内水力は既に盛んに利用されつゝある、潮力も其の干満の差の大きい處、例へば瑞典の如きでは既に利用されて居る、地熱、太陽熱の利用も今日では夢想だにすることの出來ない方法に依て、最も安價な發電の原動力を吾等に與へて呉れるであらう。

次に夏の空を走る稻妻、あの空中電氣の利用で

ある。稻妻の一閃に含まれて居る勢力は約百萬キロワットと云ふ事である。即名古屋市にある電燈の總數の約四十倍のものが、これに依て点せられることになるのだ、スタインメッツ氏は夙にこれの利用について研究して居られたが、未だ結論に達せずして逝つた事も惜みても餘りあることである、獨乙のアー・ブラツシユ氏等も數年前からこれに着眼して、この様に恐しい勢力のある空中電氣の捕集を研究しつゝある、そして斯くして捕集した電氣を（直接利用することが出來なければ）原子エネルギーの解放に應用せんとして居るのである、即吾々の知る物質の原子は莫大な勢力をその中にひそめて居るのである、若しこれを破壊することが出來たならば偉大な動力源を求めることが出來るのである。一握の砂にも全世界の船舶を數萬年續けさまに驅走せしめるだけの勢力を秘めて居るのである。若しこの事が出來たならば今日の原動機の如きは比較にならない程原始的のものとして使用されなくなるであらう。

更に電力の輸送に就て見るに、今日では總て導體に俟たなければならぬのであるが、今後は無線

の電力輸送が行はれ、其結果として無線電波を送つて操縦者なき無人の飛行機、タンク、軍艦、水雷、汽車等の操縦が行はれるであらう。無線操縦は既に三十餘年前英人ウイリソン氏に依り研究せられて居つた、かの光電池を利用して光に向つて突進する電氣犬の發明者である英人ハモンド氏も約四十哩までの距離にある船艦の操縦に成功して居る。無線操縦は軍事に應用するため其後真空管の發明後は殊に各國共競つて其の研究を進め、我國に於ても昭和四年驅逐艦卯月を無線操縦して、相當の成功を得たことは新聞紙上に報導せられた通りである。

照明に就て見るも、今日の電燈の如きこれを昔日の行燈に比較して其優秀を誇つて居るが、その發光能率は二・三パーセントに過ぎない有様である、今後は更に無熱燈の研究、冷光照明への躍出をも考へねばならぬ。

尙今後大いに研究の餘地ありと思はれるものに電氣の貯蓄法がある、今日の蓄電池は容量、重量のみ徒らに大きく、電氣容量の小さいものであるとして蓄へ得るものは直流に限られて居るが、化

學作用以外の方面より交流電氣をも蓄積し得られ或は又豆電池を以て飛行機を飛揚し得ることも妄想とのみ言へない時が來るであらう。

來るべき電氣利用の方面は以上にして止まらない、電氣機械の能率増進、醫療への應用、電氣栽培、直流の自由變壓、天体交通への應用、着色寫眞の電送、テレビジョンの實用化、其他少し物騒な話ではあるが、殺人光線、殺人音波等枚舉に暇がない程である。

『ローマは一日にして成らず』と云ふが、今日の文明は實に、その以前の科學者の數多き苦心と發明にかゝる電氣の應用に依て推進せられて來たと稱しても過言ではない、若し今日吾人の社會から電氣を一日でも取り去つたならば、その活動は根本的に停止されるであらう、然し電氣界はまだ若い、なすべき事の多くはなほ將來に残されて居る吾々は徒に安閑として居ることは出來ないではないか。

文章問答

五 風 山 人

生徒『私は文章が下手で困つて居りますが、上手になる祕傳はございせんか。』

先生『上手になる極意か、それはあるよ。』

生徒『その奥の手を今日は是非教へていただきたいものです。』

先生『よろしい。教へて上げよう。』

生徒『では教へて下さい。』

先生『別に極意とか祕傳とかいふものは外にはありやしないよ。たゞ本當のことを文字をかりて、書くだけのことさ。』

生徒『たゞそれだけですか。』

先生『さうだ。たゞそれだけさ。』

生徒『そんなことなら、早くから知つて居ます。』

先生『そこだよ。早くから知つてゐても、なかなか、本當のことは、書けないのだ。』

生徒『さうでせうか。本當のことを書くのはそんなに、むづかしいでせうか。』

先生『本當のことを本當に書くには、非常な修業が

いるよ。』

生徒『では、本當の事を思ふまゝに書くにはどうすればよいのですか。』

先生『さうだ。本當の事を思ふまゝに、眞實に、正しく、書くには、何よりもさきに、自分の心から直してかゝらないとダメだよ。』

生徒『自分の心を本當に正しくするのですか。』

先生『さうだ。お前の心が大切なんだ。それで先づ、自分の心が正しいかどうかをよく反省して、小供のやうな正直な偽りのない無邪氣な心になり切るように修養することが一番に大事なんだ。弓を習ふ時に、先づ第一に姿勢を正しくする型カタといふものを教へられる。其は的を射る前に、姿勢を正し、心を落ちつけるのだ。心が曇つて落ちつかない時は、矢の當る筈がない。文章もさうだ。文章といふものは、やはり、心の姿が、文章を通して外に表はれたのだ。心の外に何があらうか。だから、お前の心さへ淨く美しく正しいなら、その文章もその通りに外へ現れるよ。それで心の塵を拭ひとることを第一に心がけるがよい

其れが最初であり又、最後である。』

生徒『先づ心を正しくせねばならぬ道理はよくわかりました。それではもつと何か心得ることを教へて下さい。』

先生『本當のことを書くのだよ。』

生徒『また同じ事ですね。』

先生『さうだ。本當の事をかくだけだよ。なか／＼これが出来ないのだからね。同じ事をくり返していふよ。』

生徒『さうですか。』

先生『さうだよ。天下に、本當の事を本當に書いたものは、たんどはありやしないのだ。』

生徒『さうでせうか。』

先生『さうだよ。世界中に、眞實に眞實を書いたものはごく少ないのだからね。實際、この眞實を眞實に表現するくらゐむつかしいことはないのだ。眞實といふことが、お前にはよく理解されてゐるかね。かういふ自分も恥しいことだが、その眞實なるものがまだ、よく悟れてゐないのだよ。正直にいふがね。』

生徒『さうですか。先生でも、まだ、その眞實が

おわかりでないのですか。是は驚きました。』

先生『さうだ。まだ、私も修業最中さ。そんなに早く眞實が悟れるものかね。』

生徒『ぢや、本當の事、眞實のことを悟らないうちには、本當の文章は出来ないのですか。』

先生『さうだよ。この頃世間にいくらも、出て來る小説でも歌でも詩でも大ていのもは、ウソ物だよ。本物ぢやないよ。眞實の物は、そんなに早く、容易に生れない。眞劍に生きた人が、血みごろになつて修業をし、一生の生命を捧げて書いたのでなくては、本當の物ではないね。昔から今日までも、生きてゐて光りを發つてゐるものは、みな何十年といふ長い一生の努力の結果生れたのだ。有名なゲーテのファウストは、あの大天才といはれるゲーテが、六十餘年も費して血の出るやうな辛苦をなめて書いたのだからね。永久に生命のある傑作は、みな、命がけの努力から出來たものだ。本當の物は容易に生れない道理をよく考へて欲しいよ。お前はまだ若い青年だ。今から、眞實の物を生み出すことに心向け

て正しく生きて行かなくてはいかぬ。文章、本當に光る文章の源はこゝに在るのだ、基礎はこゝにあるのだ。この地盤をしつかり固めなくてはなぬ。若一、文章は筆さきや、手さきの仕事で、一寸した細工物のやうに思つてゐたら大きな間違だよ。本當の事、眞實の事を書くために先づ自分の心を反省して自分の心を深く高く大きく立派なものにすることを第一に心がけねばならない。さうしたら自然にお前の生命から本當の詩も文も歌も生れてくるに違いない。』

生徒『ありがたうございました。よくわかりました。是からは、自分の心を磨くことを第一に心がけます。さうして本當の事をかくことに氣をつけます。』

先生『さうしなさい。今私の言つたことは本當の言葉なんだ。何よりも大切なことなのだ。他に細かい注意はあるが、それは今度の時に話してあげよう。それから、今、私が言つたやうな言葉を武者小路氏がその著『文學に志す人』の中に述べてゐるから、序に讀んであ

げよう。よく聽きなさい。』

『本當の事』

『本當の事をかゝなければならぬ。どんな不合理なことがあつても本當のことをかゝなければならぬ。都合よくものを見ることは許されない。しかしかく云ふのは事實をありのまま、かけと云ふのではない。自分の經驗したことをのみありのまゝにかゝなければならぬ。いと云ふのではない。我等は本當のことを知らずに生きてゐることが多い。我等は自分の死ぬことも忘れて生きてゐることが多い。たゞ何となく生きてゐると云ふ時が多い。本當に生きることを云ふことは容易なことではない。(中略)……自分は今本當のことにふれる力の生長してくれることを望んでゐる。本當のことを正視することは餘程の強者でなければ出来ないことだ。本當のことをかけばいと云つても、凡人には永遠に本當のことはわからない。釋迦にして始めて老病死が人間の無常を本當のこととして感ずることが出来たのだ、我々ならば他人事としてすますとが出来

るが、釋迦には出来なかつたのだ。死刑を見てその本當の事を感じるこの出来る人はトルストイやユゴーのやうな人でなければ。駄目だ。林檎の落ちることの本當のことを知るのにはニュトンのやうな人でなければ駄目だ。本當の事はいたる處にあるが、我々の神経は過度の刺戟を恐れて、本當のことを見る前に两眼を閉ぢてしまう。本當のことを何處迄も正視すると云ふことは容易なことではない。

(中略)……人は本當のことを正視する時、愛を生み出さないではゐられない。其處に神を見る。本當のことに愛があり、愛する處に神がある。

本當のことを見る時、人は嚴肅にならないではゐられない。

本當のことを正視し得る人間は人類的の愛をもてる人に限る、人類の運命の爲には我が身を忘れる人でなければならぬのだ。我が身のことを思ふものには本當の事は恐ろしすぎる。(中略)……撰ばれたる者の仕事をしながら、本當のことに目を閉ぢることは恥づべ

きことだ。自分は自分の一生をもつて本當の事より本當の事を見てゆきたいと思つてゐる。さうして人類の運命の爲に筆をとりたいと思つてゐる。又さう云ふ人の出ることをのぞんでゐる。今日本には若い本氣の人がむく／＼と頭をもたげ出した。何か生れる時やがてくるだらうと思ふ。

自分はいやが上に本當の事を見てゆきたいと思つてゐる。』

(昭和六年二月廿四日稿)

音に聞えた名古屋

く す り や

十四五年前のことだ、公園に何萬といふ青年團の人たちが集つて、軍樂隊の伴奏で市歌だの團歌(?)だのを合唱したことがある。それが毎月二回の行事になつてゐた。當時私はまだ名古屋を知らず、ある雑誌でそのことを見たのだが、私にとつてこれほど強く名古屋を印象づけたものはない。十軒に一人の割合で琴のお師匠さんがゐると傳へ

られたりして、かね／＼名古屋といふ土地が音樂の、あるひは音曲の、さかんどころだとは聞いてゐたが、合唱とは愉快だ。そのころ私の居た土地にも毎月公園に奏樂があつて、ある夏の晩、樂長から國歌（軍樂隊の定期演奏には必ず國歌が最後に奏せられる）に合唱することを勧められた。が、さてタクトが振りおろされて、二萬ぢかくの人がゐたのだが、湧いて出たのは十人たらずの聲それもだん／＼細くなつて、最後まで唱ひ通したのは一人きりだつた。私ではない、私はその勇敢な男の顔をまだハッキリおぼえてゐる。

唱ふことにテレないのは唱ふことが好きだからだ、唱ふことの好きなものは歌のよしあしを知つてゐなければならぬ。事實、その通りだ。實際名古屋の市歌はいゝ。どこへ出しても恥づかしくない立派な歌だ。そして、見たこともない柳が懐かしかつたり、南洋あたりの土人にふさはしい哀しいフシをもつたりする歌は、此の土地では顧みられない。名古屋の名所は遂に行進曲（！）で紹介されるウキメをみずにするだ。——前號の校報は校歌の原稿を募つてゐる。さぞ、すばらしいのが

出来ることだらうと私はたのしみにして待つてゐる。

送第二十五回卒業諸子

甲 山 居 士

三歳業成偕快哉

世波待汝試排開

維誠維忍須奮勵

天佑無親向善來

卒業生に與へて

小 和 田

○ 學校を出たことを鼻にかけてはいけぬ。大學を出たさて何も自慢にはならぬ、況んやこの學校を卒業して直ちに偉い者になつたつもりであるなごは考への深い人から見たら笑止千萬である

○ いつまでも學生の氣持で自己を生長させて行き給へ。早くから納まりかへつて小さく老成して了つてはいけぬ。専門方面の勉強もつゞけ給へ。すぐれた小説をも讀み給へ。

○ 人生の様々な問題にぶつかるとにちがひないが、決して早まり給ふな。自殺なごし給ふな。人の世は廣いし、生きがひを感じるものはごこにでも見出せるよ。そして他人を不幸にしないやうな道で自分を幸福にし給へ。僕でよければ何なりと相談相手になるよ。

卒業に際して我々の覺悟

畫本科 内 田 生

降り積る雪もあはたしく消えて、草木の若芽は輝かしき春の陽光を浴び、成長へくこの生命の力強き呼吸を續けてゐる。

斯の如き中にて終に我々の卒業が到來したのだ。今日になつて追憶して見れば意外に短い三ヶ年であつた、しかしその短い三ヶ年の間が我々の生涯に於ける最も有意義な修業の道場にて費やされたのである。従つて來るべき卒業は過去三ヶ年の貴い收穫でなければならぬ。然し此のめでたき卒業を待つべき社會は、決して平穩ではない。世をあげての不況の風はさしく我々にも侵入してきたのである。然しながら不況は我々に對し如何に物質的に大なる恐慌を與へても、我々は精神的に何らの悪影響を及ぼされてはならない。我々の最も恐るべきは内面的空虚である。世には往々にして内面的空虚を覆はんが爲に、物質を以てする者あるは實に言語同斷の沙汰である。内面的に空虚な人間はあたかも綱を離れた氣球の如くさまぐれな風の欲するまゝに無意義な放浪の旅を續けるのである。而して如何なる時、如何なるものが導火線となつて、其の氣球は爆發するかも知れないのである。公園のベンチで飢と寒さに戦ふ労働者、驛のストーブを獨占して終日の暖を貪る労働者の精神的に且物質的に空虚らしそうな様子を見よ。彼等こそ綱を離れた氣球ではなからうか？

卒業はたゞに過去在學中の清算期のみならず來るべき世界への出發点なのである。故に我々は周到なる用意を以て卒業に際しな

ければならない。たゞへ社會の現状が我々を冷遇するといへどもこれは運命が與ふる貴い試練であつて、我々は何時でもこれに耐へ得るだけの精神的資格を有せねばならない。我々は充實した精神によつて、一歩／＼健全な歩みを續ければ、必ずや現狀を打開し而して曙光を見出し得るものと確信するのである。(以上)

卒業に際して

畫本科 荻 野 公 平

冬は去つてしまつた。其して新らしい春が今窓外に訪れて來た。明るい麗な光が天地の間に満ち／＼と、今迄霜雪に閉ざされてゐた固い大地に、ほんのりとした暖かさを與へると、眠つてゐた草花の柔かな青白い芽が、生きてゐる喜びにふるへながら春を歌つて点々と頭を擡て來る。軟い風が美しい音樂を奏でながら、あの白浪の躍る海の香を遠い紫色の山へと誘つて行く。其の山の紫色の衣が次第に青い色に變つて行く。綠色にすんだ水の中に小魚の影がゆらめいてゐる。あゝ春は訪れて來た。

一年生から二年生になる春の進級試験の時だつた。第五教室の一番南側にゐた私は、さら／＼と鳴る鉛筆の軽い音に稍昂奮してゐた。が、ふと窓硝子を通して見た瞬間に、私の眼にはあの青空が映じた。あゝそれは何と云ふ美しい色だつたらうか！柔かな美しい光を湛へた青色をじ／＼と眺めてゐると、幽かな旋律が響いて來る。天使の奏でる樂の音が、あの風に乗つてあの光に送られて來るかの様に。私はうつつさりと其の青空を眺めてゐた。私は何時

でも春が来る度にあの時の事を思ひ出す。聽て私達は「若きエンヂニア」だ。私達の目の前には唸りを立て、廻轉するダイナモがモーターが、高らかに文化の世界を謳歌してゐる。けれど何がどんなに此の物質的文明の世界を謳歌しようとも、私達は人間なんだ。そうした豊かな感情の所有者だ。私達はあの青空の響を聞く事が出来るんだ。再びいふ、私達は「若きエンヂニア」だ。けれどあの青空を忘れないでよう。自然の囁に何時も耳を傾けよう。自然の囁を忘れた時は、もう私達は人間ではないんだから。

三月！嗚呼此の三月！私達の卒業の日は次第に逼つて来た全く知らなかつた人達がお互に一つの室に集つて、三ケ年さう長い年月を共に親しく暮らして来た。けれど總ては過去だ、歸らぬ日の懐しい思出に過ぎないのだ。今私達は再び離れ離れの人々ならうとしてゐる。而しお互はもう決して知らない人々ではない。友達さういふ言葉の下に因縁づけられた人達なんだ。手を取らう。其して、しっかりと大地を踏みしめて行こう。

螢の光、窓の雪、

文よむ月日重ねつ、

.....

別れの歌が静かなリズムで窓邊を通り過ぎるさ、私達の瞳には熱い涙が滲んで来る。男だけれど、泣こうよ！美しい涙だ。麗しい情愛だ。さあ涙を拭いて手を握らう。其して恩師の爲にお祈りしよう。「何時までも御健全ならん事を」最後に心からなる別れの言葉を交そう。

「さようなら、御健康で.....」

畫本 古田佳南米

もう卒業だと思ふさ、なんどなく學校が急によくなる。短い三年間が夢のやうに過去つて今になつた、三年間の中には色々な事があつた。

一字も讀めなかつた英語や漢文も讀める、工學も基礎だけ解り出した。今更のやうに先生の有難さが感じられてくる。

校舎が出来て校主が迎へられ共に健康本位の運動熱が盛になつてきた。そして四大節も堂々式が行はれ真心で歌ふ莊嚴な「君が代」が美しく響いてゆくときは又何とも云はれない。

鬼ヶ頭でも取つたやうに金釦の胸を張上げて制帽を冠つて通學した入學當時の樂しかつたこと、それが此の頃のやうだ、三年間の中に何を待たか解らない、けれども得る所のあつたと思へるの、今迄感謝することを忘れてゐた自分も親切な教訓により解り出した、そして其の日々の大切な事が感ぜられ、又昔の學窓を思ひ出す忠孝と云ふことも判然としてきた。

物質で得られない教育の有難いことに氣がついてきた。

且馴れた校舎や先生も一層懐しい、けれども情にさらはれず感傷的な心を去つて男性的に強く正しく明るく其の日々の最善を盡して進まう。(二月二十九日夜)

三年は過ぎた

畫本科 大野

春がすぎ夏となり夏が去つて秋となり冬から春へ……こうした四季の去來の中に僕が名古屋電氣學校に輝しい希望を抱いて入學してからも三霜が夢の間に過ぎて、昭和六年の春が梅の花のほころびを先驅として靜かに訪れて來た。空を流れる雲に池に淀む水に流れる川の水音に鳥の聲に路傍の踏みにぢられた冬も知らぬ草の根に普く力強い春の鼓動が打ち始めた。

昭和三年の春から六年の今日迄三年と云ふものを、青春の喜びの中に夢の様にして了つた私だつた。多額の金を費し貴い三年の月日を了つて了つた今、自分は果して何を成る事が出来たらうか。世の若人の所謂青春の夢と無駄な空想に貴い月日を送つて了つたのではなからうか、否諸先生の熱誠の御教へて吾等のたゆまざる努力との協力は力強く、一歩一歩と最後の完成に向つて進んで來た事を私は確信する事が出来るのだ。實に三年間を通じて少なくとも悔を残さなかつた事は神に感謝して尙余り有るものがあるではないか。級の團圓そこには常に限りない喜びと希望が充ちてゐた。その三年間の團圓に百余の純な若木は何のこたはりもなくすく／＼と育つた。だがその中には悲しむべき敗退者や自らを、自滅の淵に沈ませた友も居た今彼等は何處に、ゐるだらうか。學の敗殘者は尙社會の敗殘者として弱々しく希望も楽しみもない暗い道をさまよつてゐるのではなからうか。否必ず彼等は眞實の自己によみがへつて更生の道を雄々しく突進してゐる事だらう。

あゝ幸福と希望に充ちた三年間は私に今、明らかに進むべき道を教へて呉れた、たゆまざる努力そして堅實なる歩みとは固く私の胸に刻まれたのだ。希望と幸福の學園は今私から永久に離れ去

らうとしてゐる。だが私の心には懐しき學窓、夢として永久に記憶に残るのだ。そして何處かの地から母校の過去の追憶に更ける事だらう。

今吾等の、乗る名電丸は三年の航海を終へて、漸く目的地を目前に望む事が出来た。だが直ちに又生活丸に乗換へ、渦巻く社會の大洋に果てしない航海を続けなければならぬ。吾等に社會の荒波は如何なる試練を與へるたらうか。

社會は大學校である

書本科 淺若 貞吉

小學校や中學校又は女學校の卒業期眼前に迫つて參りました。我々も其の一人として此の三月に母校を後に去らなければなりません。此の卒業を眼前に控へ我々は同時に考へねばなりません。「第一に自活せよ」た近頃流行して居る「學校病」なる物に取りつかれない様にせねばなりません。

學校だけが自分を賢くしてくれる場所であるを考へるにも原因しますが、親か或は特別の保護者より學資金をみついでもらつて學問を遊びながら樂にしたいと云ふ怪しからぬナマケ根性がある所の如きものに成功したものはありません。今日堂々たる大學の卒業生が就職難に苦しめられ青息吐息五色の息を吹き分けるやうにして惱んでゐるのは實に是れが爲ではないでせうか。上げ膳下げ膳で御給仕をしてもらつて學問をしようさなんか云ふフヤケたナマケ根性がよくありますまい。

諸君よ自活の道を選ばれよ、決して學校のみに學問する所ではない。同級だつた何々君は某専門學校へ、又何々君は某大學へ入つたさうな良い所へ入つたな。と羨ましがらぬ、社會其の物が大學校です。學問は決して樂をしながら出来る物ではない。此の樂をせずに苦しみながら學問をしよう云ふ決心さへあれば強いて上級の學校へ入學しなくても幾らでも學問は出来るのです、と私は思ひます。立派な人間になれると思ひます。世の中のありさある物は皆是れ書籍で森羅萬象は是れ學問の大きな庫であります。工場も田畑も店舗も皆大なる學校ではありませんか。我々は今度學窓より乘立ち立派な騎士として社會と戦はなければならぬ事を覺悟しようではありませんか？ すいぶん愉快な事ではありませんか、ちよつと變つた生活がなめられます。大いに勇氣を鼓舞して元氣旺盛に戦はれんことを希望いたします。

○
悲劇？ 喜劇？

畫本科 長 野 隆 文

悲劇喜劇此等の者を一緒に煎じ詰めた世界が卒業期だ。刻みゆく時計の音は淋しく悲劇を演じて居るでは無いか。

何だか夢の様な現の様な氣がする、然し夢でも現でも無い何處かで鶯が靜かに春を呼んで居る。

嗚呼もう卒業の期がおとづれたのだ。然し我が心は淋しい秋の様だ。

.....XXXXXX

××喜劇.....××××

君一寸社界を眺めて見よ幾多の機械は我等を呼んで居るでは無いか。君良く耳を澄まして君の腕を此處で發揮し又心をも磨き社會の荒波を渡らうではないか。そして最後の勝利を獲得しよう。

○
斷 想

本 科 無 名 生

天才の眞似をするを狂人になる。

現代でもまだお化の有る事を信じて居る人が有るのも、高位高官の人々を偉い人だと思つて居るのも當然の事さ。

科學者は其の研究の中途にて機械を發見した。そうして現今では科學者は機械屋に成り下つてしまつた。

無智なる者程幸福だ、所謂智者は苦しい、何時の間にか自由を失つた智者は單に自由なる事のみを論じて居る。

智識を得る事は美しい病だ、そうして此の病氣になると一生全治する事がない。

剝那的享樂主義者でも人間の寂しみを知つて居る。従つて彼等の説は殆ど「此の寂しさを一瞬間でも忘れる」と言ふ事に一致する

革命家は都市に於ける建築家の様に過去に如何に苦心して築かれたかを無視して新しいものを建てたがる。

下駄屋のおぢさんに人生でどんなもんか聞いたなら「不平の連続さ」と言つて居た。

一寸した事、それが極めて大きく見られ、大きな事が又極めて小さく見られる、と言ふのが人間世界の一つの矛盾だ。

人類は常に幸福要求論者の確實なる実行者である、然しながら幸福は何時迄行つても求められないではないか、科學者は古代より現代の方が如何程幸福か知れないと言ふたらう、けれども下層階級の人間は却つて如何程不幸になつたか知れない。

卒業生を送る

畫 二年 榊 原 秀 雄

三歳の星月夢とすぎ

社會の荒波ものともせず

胸おさらせて出で行く兄弟

兄弟の前途は希望に充てり

心に高き理想をいただき

幾多の艱難たゞ打ちくた

進み進めよ一直線に

母校の爲に御國の爲に
さらはさらばよいざさらば。

和 歌

畫 一年 矢 田 主 税

あかくと輝き出でし朝日影病の我也起きて拜みぬ
天地に春の力はみなぎれど枯草に泣く我れの涙は

雑 詠

夜 一年 澤 田 志 澄 生

戸をくれば人影絶えし夜の街を笛の音残し曾波屋通れり
人は皆静まり寝ねし寂し夜に爆音高く汽車は過ぎゆく
訪ね行く友なく訪づれ来る友の無き淋しさを今宵も覺ゆ

春 雑 吟

畫 本科 伊 藤 曙 鶯

船歌の風に流るゝや春の川
鮎を追ふ子供の聲や春の川

二つ三つ池に浮べる椿かな
風風きて急にしすかな春の宵
初春や青み増したる背戸のねぎ

○ 雜 詠

畫本科 萩原 萩水

支那曾波の來ぬを恨みし寒む夜かな
夕月に何やら淋し彌生空
花立につぼみの多い椿かな
春の宵琴を調べるは誰が家ぞ

○ 俳 句

畫二年 黒田 峰男

藁屋根の枯立早き霜柱ら
枯草に霜の花咲く野原かな
切れ風や見る間に越える森一つ
右にゆれ左にゆれてうなる風
井戸くわ竿の長さや雁の聲
篝火の猛と燃えけり杉の杜

初等物理學 講座

物質と電氣

1 はしがき

こ わ だ

諸君は『原子』に就て化學の時間にいろいろ學んだであらう。物質をつくつてゐる元素の種類は現在までに八十八種知られてゐるが、これらの元素が夫々『原子』を最小單位とし、その幾つかが集つて一つの『分子』を組み立てゝゐる。例へば水の一分子は水素原子二つと酸素原子一つとの結合である。そして此の様な分子が何億と集つて水の一滴が出来てゐるのである。

こんな事は既に一年の初めに知つてゐる事であるが、この『分子』に關しては物理學が教へ、『原子』は化學が教へてくれる。原子は化學の研究範圍に入り、分子だけが物理學の研究範圍に屬する。最近まではこんな風にはつきりと區分けが出来てゐたのであつた。ところが二三十年前から物質の構造に關する研究が急速に進んで、今まで原子が物質の最後の微粒子でこれ以上に分つことは絶対に不可能であると考へられてゐたのが、原子はな

は微小な或ものによつて出来てゐることが分つて来た。しかもそれが電氣を帯びた微粒子（これを電子と名づける）であることから、原子の研究が今度は物理學の研究領域になつてしまつた。

この方面の研究を物質構造論と云ひ、特に此の電子だけに就て研究する學問を電子論と云つてゐる。アインシュタインの相對性理論と此の物質構造論とが最近の物理學の主要な進展方向である。

どちらにも本式に研究するためには數學が充分できてゐなければいけない。相對性理論の方は特に高等數學の充分な素養がなくては分らない。ラヂオの真空管の作用が電子によつて説明されるなど電子論は電氣の方にも關係が深いから大体のことは知つて置く必要があらうと思ふ。校報紙上に毎號少しづつ此の方面のことを書いて諸君の御參考に供することにしよう。

授業時間の短縮を如何に補ふか云ふやうな心配をする人もあるが、ノート筆記を教科書使用に變へること等によつて實質的にはかへつて増加してゐることと思ふ。なほ九月の學年末休暇は本年から少くなる筈である。（夜間部主任）



大隈圖案社

圖案は大隈へ

市内東區西新町一丁目
電話（呼出）東一七番

次號原稿締切 四月三十日

昭和六年三月十日印刷
昭和六年三月十二日發行

非賣品

編輯人	小和田 傳
印刷人	渡邊 榮三郎
發行所	名古屋市中區新榮町三 名古屋電氣學校
印刷所	名古屋市中區南伊勢町二 中京毎夕新聞社